

平成19年度研究報告書

被虐待児への学習援助に関する研究

—被虐待児の感情認知および 課題時の行動観察に関する研究—

研究代表者 宮尾 益知 (国立成育医療センター)
共同研究者 五十嵐 一枝 (白百合女子大学)
鈴木 繭子 (国立成育医療センター)
池田 華子 (東京大学先端科学技術研究センター)
小笠原さゆ里 (国立成育医療センター)
渡邊 克巳 (東京大学先端科学技術研究センター)

社会福祉法人 横浜博萌会

子どもの虹情報研修センター

(日本虐待・思春期問題情報研修センター)

平成19年度研究報告書

被虐待児への学習援助に関する研究

—被虐待児の感情認知および
課題時の行動観察に関する研究—

子どもの虹情報研修センター

目 次

はじめに	1
1. 被虐待児の感情認知に関する調査	2
(1) 目的	2
(2) 対象及び方法	2
(3) 結果	3
(4) 考察	6
2. 学習場面および検査場面における被虐待児らの行動特徴について	8
(1) 目的	8
(2) 方法	8
(3) 結果と考察	8
3. 総合考察	10
引用文献	11

図 表 目 次

表 1	対象の内訳	2
表 2	課題文	3
表 3	課題文別エラー傾向	4
表 4	エラーにおける反応カテゴリー	4
表 5	個人別エラーパターン	5
表 6	エラー型式別人数および型別属性	5
図 1	エラー量平均	3

はじめに

被虐待体験による被虐待児への精神的、心理的、行動的影響については1990年代後半以降様々な報告がなされている。奥山¹⁰⁾は被虐待体験による心理的・精神的影響を発達上の問題と心的外傷の問題とにわけ、発達上の問題として「自己抑制力の低下」「体験のisolation」「自己評価の低下」「怒りをかう行為」「自己の連続性の低下」を、心的外傷の問題として「PTSD」「虐待の再体験」をあげている。亀岡²⁾は自験例をDSM-IVに基づいて診断し「反応性愛着障害」「摂食障害」「注意欠陥多動性障害」「行為障害」「境界性人格障害」の診断がついたことを述べている。また杉山¹⁴⁾は被虐待児の予後の問題として反応性愛着障害、多動性の行動障害、解離、PTSD、非行、複雑性PTSD、DESNOS、境界知能をあげている。

被虐待児はその被虐待体験の結果として出現する問題として、PTSDや抑うつなどの精神症状や反応性愛着障害や解離性障害などの精神疾患などに認められる心理的・精神的問題と、行為障害や非行、自傷行為、触法行為などの行動上の問題に加え、学習行動の問題といった学習上の問題があげられる。特に最後にとりあげた学習上の問題については、知能検査および前頭葉機能検査などの神経心理学的検査と実際の学校における成績との間には大きな差が認められるといった報告⁵⁾や現場の声としての学力の問題について言及する報告などが散見される^{3) 8) 9)}。また2007年の日本子ども虐待防止学会でも知的機能の問題について丹羽⁷⁾が報告している。が、被虐待児に関する実際の学力の状態や被虐待児の認知過程についての研究は十分ではない。

われわれは被虐待児の認知特性及び学習に関する問題を神経心理学的に検討することは問題行動の病態を考える基盤となると考え、認知発達の特異性を明らかにすることを目的に、神経心理学的検査及び学力検査等を用いて検討した結果の報告を行ってきた（詳細は総合考察に後述）。

平成19年度は前述の認知特性に加え、対人認知及び社会的認知の獲得に関して重要であると考えられる感情認知について検討を行った（課題1）。被虐待児の表情認知および社会場面の認知に関しての先行研究では、その特異性が報告されている^{2) 8)}。しかし現在のところ、特定の場面における被虐待児の認知とその対応についての研究はほとんどみられない。表情認知および社会場面の認知は、前述した学力や人間関係を構築していく上でも必要となってくるスキルでもあり、その特徴を検討することは必要と思われる。

また、学習場面における行動の問題を明らかにすることを目的に、学習場面のビデオ解析に着手した。本年度は視空間手続き課題時の行動観察コメントと検査時に撮影したVTRをもとに見らの行動特徴について考察した（課題2）。ビデオ解析とデータ整理については平成20年度も引き続き行う予定である。

1. 被虐待児の感情認知に関する調査

(1) 目的

本研究は以下の2点を目的として行われた。1) 感情認知場面課題における被虐待児群の成績を定型発達児群と比較する。2) 感情認知場面課題における被虐待児群のエラーの特徴を検討することで感情認知に関する被虐待児の特徴と課題を推定し、学習支援の方法の検討の材料の1つとする。

(2) 対象および方法

(1) 対象

情緒障害児短期治療施設X学園に入所している被虐待体験を有する児（以下ABUSE群）11名（男：女＝8：3）を対象とした（表1）。平均年齢は12.12歳（SD＝1.58）であった。入所時に施行された知能検査では全例が知的に標準域であった。対照群として都下の小中学校普通級に自宅から通っており、発達および環境にも問題の認められない定型発達児（以下CONTROL群）14名（男：女＝8：6、平均年齢11.52歳 SD＝2.19）にも同様の課題を行った。

表1 対象の内訳

	N	年齢平均(SD)	sex
ABUSE群	11	12.12(1.58)	男8女3
CONTROL群	14	11.52(2.19)	男8女6

(2) 方法

感情及び社会性を評価するために、Howlinら¹⁾の研究をもとに筆者らが作成した感情認知場面課題を施行した。感情認知場面課題はHowlinらの「状況における」感情を自閉症児へ指導するための視覚的シナリオの48 situationsのうち「喜び」、「悲しみ」、「怒り」、「恐怖」の4種類の文章を各3項目、合計12項目を提示した（表2）。対象児は各項目に登場する主人公がどのような感情であるかを橙、青、赤、紫の4色の色鉛筆から1本を選択し、さらに解答用紙に主人公のセリフを記述した。Howlinらの課題では表情を選択しているが、我々の先行研究⁶⁾におけるパイロットスタディでPDD児らが提示された表情自体の認識が困難であることから、感情を色で表すこととし、色鉛筆での選択を採用した。本研究の課題についても先行研究⁶⁾にならい、方法を同一にすることとした。

以上の検査結果より、特定場面における感情認知の特徴について検討した。

表2 課題文

提示順	感情カテゴリー	
1	喜び1	お父さんは女の子に、おやつにケーキを買ってきてくれました。
2	恐怖1	男の子が道を歩いていると、大きな犬が後ろから追いかけてきました。
3	怒り3	友達が後ろから突き倒したので、男の子はかけっこで一番になることができませんでした。
4	喜び2	女の子は友達からブランコを押してもらいました。
5	恐怖3	トラックが男の子へむかって猛スピードで近づいてきています。
6	悲しみ1	男の子は転んだ拍子に、持っていたオモチャの飛行機を粉々にしてしまいました。
7	喜び3	男の子は、海で大きな魚を釣りました。
8	怒り1	男の子のミニカーを友達が踏んで壊してしまいました。
9	恐怖2	女の子はお店でお母さんからはぐれてしまい、迷子になってしまいました。
10	悲しみ3	大雨で、男の子が持っていた絵はぐちゃぐちゃになってしまいました。
11	怒り2	女の子がクマのぬいぐるみを持っていると、友達がそれを持って行ってしまいました。
12	悲しみ2	女の子のおじいちゃんは、遊びに来ていましたが、もうすぐ帰ってしまいます。

(3) 結果

(1) エラー量

各文章には想定される感情カテゴリーが存在しているが、想定されている感情カテゴリー以外の感情を児が選択した場合はエラーとした。感情カテゴリーごとのエラー数を数え、それぞれ群の人数ごとに割り、エラー量の平均とし図1に示した。CONTROL群では幸せ場面におけるエラーが0という結果であった。また、両群ともに怒り場面、恐怖場面共にエラーが多くなっている傾向がみられた。

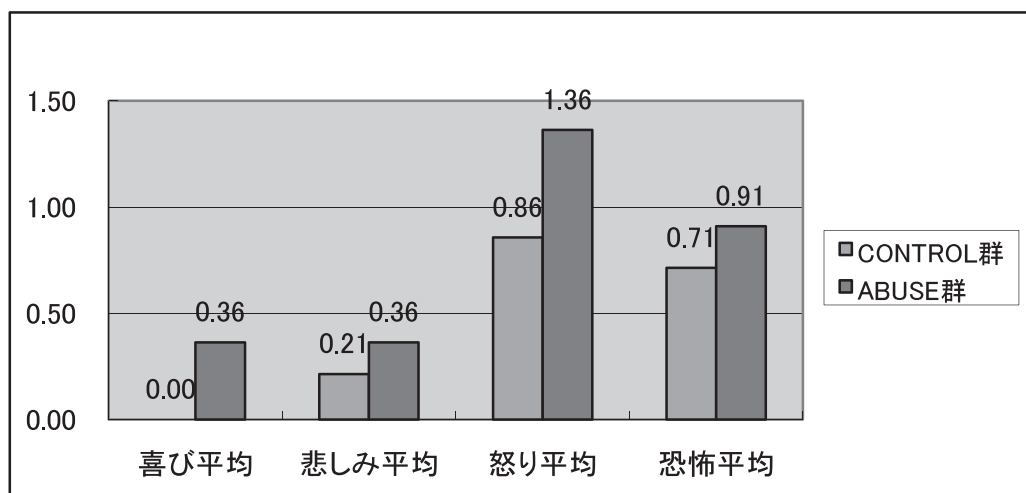


図1 エラー量平均

(2) エラー時の反応カテゴリー

次に課題文ごとの被験児の反応を表3に示した。その反応カテゴリーについての合計は表4に示した。反応カテゴリーの結果より、CONTROL群、ABUSE群ともに「主人公の気持ちは悲しみである」とよみ違える傾向が他のカテゴリーへのエラーと比較しても多くみられた。またCONTROL群は恐怖カテゴリーの反応は0だったものの、ABUSE群は4であった。反対に幸せカテゴリーにおいては

CONTROL群が1、ABUSE群が0という結果となった。

表3 課題文別エラー傾向

	喜び1	恐怖1	怒り3	喜び2	恐怖3	悲しみ1	喜び3	怒り1	恐怖2	悲しみ3	怒り2	悲しみ2
CONTROL群	S 0	H 0	H 0	S 0	H 0	H 0	S 0	H 0	H 0	H 0	H 0	H 1
	A 0	S 1	S 5	A 0	S 0	A 1	A 0	S 5	S 7	A 1	S 1	A 0
	F 0	A 1	F 0	F 0	A 0	F 0	F 0	F 0	A 0	F 0	F 0	F 0
ABUSE群	S 0	H 0	H 0	S 0	H 0	H 0	S 0	H 0	H 0	H 0	H 0	H 0
	A 0	S 2	S 6	A 1	S 0	A 1	A 1	S 5	S 8	A 1	S 2	A 1
	F 0	A 0	F 0	F 1	A 0	F 1	F 0	F 0	A 0	F 0	F 2	F 0

H:喜び、A:怒り、S:悲しみ、F:恐怖

表4 エラーにおける反応カテゴリー

	喜び	悲しみ	怒り	恐怖
CONTROL群	1	19	3	0
ABUSE群	0	23	5	4

(3) エラーパターンの個人別一覧および反応パターン

- ① 表5では対象児がエラーをした課題文のカテゴリーとその反応カテゴリーを個人別に示した。ここでは「(H) : 幸せ」「(S) : 悲しみ」「(A) : 怒り」「(F) : 恐怖」とした。「F→S」という表記は「恐怖のカテゴリー文において、悲しみという反応を選んだ」ということである。個人別の表によりエラーの特徴をみると、CONTROL群は一人当たり3までのエラーに留まっているが、ABUSE群は一人当たりのエラー量が4以上である児が5人(45%)となった。

表5 個人別エラーパターン

	No.	sex	年齢	学年	1 2 3 4 5 6 7							エ 型 ラ ー	
C O N T R O L 群	C1	女	6.1	小1	A→S	F→S							1
	C2	男	7.2	小2	A→S	A→S	F→S						1 *
	C3	男	8.5	小2	F→S	F→S							1
	C4	女	10	小5	A→S	A→S	F→S						1
	C5	男	10.5	小5	F→S	S→H							4
	C6	女	11.7	小5									3
	C7	女	11.7	小5									3
	C8	女	11.8	小6									3
	C9	男	12.2	中1	A→S	F→S							1 *
	C10	男	13.8	中2	A→S	F→S	A→S						1 *
	C11	男	14.3	中2	A→S	S→A	A→S						1 *
	C12	男	14.3	中2	A→S								1 *
	C13	女	14.6	中3	F→S								1
	C14	男	14.6	中3	F→A	S→A							2
A B U S E 群	A1	男	8.5	小3	H→NR	F→S	H→A	S→A	H→A	F→A	S→A		2
	A2	男	10.5	小4	A→S	S→F	F→S	S→A					4
	A3	男	10.7	小5	F→S								1
	A4	男	11.1	小6									3
	A5	女	11.4	小6	A→S	A→S	F→S	A→S					1 *
	A6	女	11.8	小6	A→S	H→F	A→S	F→S	A→F				1 *
	A7	男	12.5	中1	F→S	A→S	A→F						1
	A8	男	13.5	中2	A→S	A→S	F→S	A→S					1 *
	A9	男	14.1	中2	A→S	A→S	F→S						1 *
	A10	女	14.5	中2	A→S	F→S							1
	A11	男	14.7	中2									3

★表の見方

●→◎ ●:課題文のカテゴリー ◎:被験者の反応カテゴリー

エラー型:そのパターンにより4種にわけた(表6参照)

*:1型のなかでも特にA→Sのパターンを示したものにつけている。

- ② 表6ではCONTROL群、ABUSE群ともに年齢によりエラーの出現頻度が変化することはなく、感情場面認知課題における発達的变化によるエラーの変動への影響は特になくことが示唆された。

表6 エラー型式別人数および型別属性

	エラー型式		ABUSE				CONTROL			
			反応数	割合	反応例	男女比	反応数	割合	反応例	男女比
1	悲しみ反応型	●→S	7	63%	A3, A5, A6, A7, A8, A9, A10	男4:女3	9	64%	C1, C2, C3, C4, C9, C10, C11, C12, C13	男6:女3
	怒り→悲しみ型	A→S	(4)	(36%)	(A5, A6, A8, A9)	男2:女2	(5)	(36%)	(C2, C9, C10, C11, C12)	男4
2	怒り反応型	●→A	1	9%	A1	男1	1	7%	C14	男1
3	課題感情一致型	E=0	2	18%	A4, A11	男2	3	21%	C6, C7, C8	女3
4	非定型型		1	9%	A2	男1	1	7%	C5	男3

③ 個人別のエラーの傾向により4種の型に分類し(表5・エラー型)、その人数と割合、及び型別に学年および性別をまとめた(表6)。1の悲しみ反応型は誤反応として悲しみカテゴリーを選んだ児である(ABUSE:7名、63% CONTROL:9名、64%)。悲しみ反応型に関しては怒り場面でのエラーが非常に多く見られたことから特に人数と割合を算出した(ABUSE:4名、36% CONTROL:5名、36%)。2の怒り反応型は誤反応として怒りカテゴリーを選んだ児で、ABUSE:1名、9% CONTROL:1名、7%であった。3はエラーが認められなかった児で、課題感情一致型と名づけた(ABUSE:2名、18% CONTROL:3名、21%)。4は1、2、3のどの型にも属さない児で、ABUSE、CONTROLそれぞれ1名ずつ見られた(ABUSE:9% CONTROL:7%)。CONTROL群、ABUSE群ともにエラー時の反応により個人の特徴が出ていたため、反応型により分類した。型による人数構成には両群共に差が認められなかった。

④ エラーパターンにはCONTROL群とABUSE群との差異は認められなかった。両群共に「主人公の気持は悲しみである」と間違える傾向が見られた。つまり怒りや恐怖といったnegativeな意味が含まれている場面を悲しみとみなす傾向が両群に共通していると考えられた。

一方、両群における相違点としては、CONTROL群は幸せ場面でのエラーが認められなかった一方、ABUSE群は幸せ場面を「怒り」「恐怖」と認識する児が見られた。また一人当たりのエラー量はABUSE群のほうが多くなっていた。

(4) 考察

エラーパターンにおいてCONTROL群とABUSE群との差異は認められないことが明らかとなった。両群共にエラー時の反応として悲しみカテゴリーの選択が多くみられたことと、課題カテゴリーでエラーが多かったカテゴリーが恐怖と怒りであったことも両群に共通していた。両群ともに恐怖と怒りの場面でエラーをし、その反応として悲しみを選択した。

Smith & Lazarus¹²⁾は生後3ヶ月頃に快の情動から分岐する形で喜び(joy)が出現すると述べている。また養育者との相互作用の中断などに随伴して悲しみ(sadness)が出現、時を同じくして口中の異物や不快な味のするものを吐出すことと結びついて嫌悪(disgust)の表出が認められる。最後に生後4~6ヶ月頃になると各種のフラストレーション状況と明確に結びついて怒り(anger)が、それより少し遅れて、好ましい状態に関する表象と現在直面している状況との比較を基礎にして恐れ(fear)という情動の表出がみられる。つまり原初的一次的情動により様々な感情が分化し、その獲得については周囲との相互作用やその児の表象理解や認知の獲得段階にも左右されるものと考えられる。Steeleら¹³⁾は被虐待児の心理的発達における問題について、乳幼児の内的要求や願望と養育環境側の反応との同調の欠如が繰り返されると、原因と結果を統合する能力の障害が見られ、象徴機能や

言語発達に困難が生じやすいと述べている。つまり原初的一次的情動の段階において環境との相互作用という点から被虐待児は定型発達児との間に経験の量や質の差が生じていることが言える。

今回の結果からはエラーパターンにおいてCONTROL群と差異が認められなかった。つまりABUSE群は経験の差により1人当たりのエラーが多くなる傾向がみられたものの、エラーパターンの検討により感情発達の順序についてはSmithらの示した定型発達の感情発達の順序と同一であることが示唆された。したがって被虐待児の表情のエラーについては発達の異常というよりは遅滞であることが考えられた。

本研究の結果におけるCONTROL群とABUSE群との相違点としては、CONTROL群は幸せ場面でのエラーが認められなかった一方、ABUSE群は「怒り」「恐怖」と認識する児が2名(18%)に認められた。ABUSE群のエラーの要因として、(1)児らの経験不足による要因と(2)意味理解の困難さによる要因が想定された。

(1) 経験不足という要因は、エラーパターンにおいて同様の傾向が見られたことから、被虐待児は定型発達児と同様の感情獲得過程をたどると推測されうる。しかし、その一方で定型の感情発達において快の経験により早期の段階で獲得されるとされている「幸せ」カテゴリーにおいてエラーがみられたという事実も存在している。その背景として、Steelら¹³⁾の報告にもある環境との同調の欠如、快を経験するような場面自体の経験が不足していることが考えられる。またPollak & Tolley-Schell¹¹⁾らは3-5歳時に虐待を受けた子(ABUSE群)と養育を放棄された子(NEGLECT群)を対象に表情認知能力の検討をおこなっている。NEGLECT群の表情認識の成績はABUSE群よりも劣っていた。さらにNEGLECT群は表情を「悲しい」と判断しがちであり、ABUSE群は表情を「怒り」と判断しがちであり悲しみや嫌悪といった表情を区別するのが難しかった。Pollakらはその結果の理由として、目にする機会が多い表情に被虐待児の表情判断が引きずられているとしており、表情認知においてその経験の有無が大きく関係しているとする我々の仮説を支持するものとする。

(2) 意味理解の困難さの根拠として、亀岡²⁾は自験例をあげ、被験児らの傾向として「周囲の社会的状況をうまく捉えられなかったり言語表現力が未熟なため、様々な対人関係の問題を引き起こす」と述べている。また今回の結果においてもABUSE群のひとりの児はほとんどの場面カテゴリーにおいて「怒り」を選択しており、意味理解もしくは対応方法における問題を有していることが示唆され、設定された場面の理解や記載されている文章の理解において特有の問題を有していることが予想された。この例では亀岡の主張と合致すると考えられた。またわれわれの一連の研究課題⁵⁾においてもABUSE群は前頭葉機能検査によりHFPDD群、ADHD群との差異がみられており、ABUSE群独特の前頭葉機能の問題が影響している可能性やその他の課題遂行時における何らかの妨害要因が生じている可能性もある。さらに件数を増やし、虐待の種類や環境因の差による違いや発達障害と考えられるケースとの違いなどを検討することが必要と思われる。ただし、家族歴や生育歴、既往歴等の情報を入手することの困難さなど、虐待研究の課題が存在している。

2. 学習場面および検査場面における被虐待児らの行動特徴について

(1) 目的

学習場面および検査場面における行動特徴を概観し、学習態度の問題を明らかにする。特に注意集中の問題を中心に考察を行う。

(2) 方法

学習場面を撮影した映像データ及び神経心理学検査・運動学習検査における行動観察をもとに、児童らの行動特徴について考察を加える。

対象者は、情緒障害児短期治療施設X学園に入所中の子どもである。神経心理学検査における行動観察は16例（7～15歳までの児童，男児9名，女児7名。平均年齢11.59（SD±2.4））、視空間手続き課題における行動観察は17例（8～16歳までの児童，男児11名，女児6名。平均年齢11.9歳（SD±2.4））、個別学習場面の行動観察は1例（中学3年生男児）であった。なお、本研究は宮尾ら⁴⁾、高田ら¹⁷⁾と対応しているため、参照されたい。

(3) 結果と考察

(1) 神経心理学検査における行動より（16例）¹

①注意問題について：

児童No.1「課題には応じておりそれなりに集中して取り組んでいるものの、注意の持続が難しい様子が見られ、終始ぼーっとしている印象でした」

児童No.13「検査場面での注意転導や集中については問題なし。しかし、『よくぼーっとしてしまう』『一生懸命考えると忘れてしまう』との訴えがありました」

検査への集中は可能である児童が多く（11/16例）、また注意の転導が激しいとの報告も少ないものの（3/16例）、覚醒レベルを指摘される児やぼーっとしている印象の児の報告（2/16例）がいくつか見られている。注意の問題を指摘されている児であっても、ADHD児に顕著に見られる注意転導の激しさから来る不注意と質的に異なる印象を受けたという報告が大部分を占めていることが特徴的でもある。

②対人距離：

児童No.10「検査者とは初対面であるのにも関わらず、非常に近くに座ってしまうなど、対人距離の独特さも見られました」

児童No.12「初対面の検査者には物怖じしない様子で、本児からの話しかけは非常に多く、距離の近さを感じました」

¹ 宮尾ら⁴⁾の巻末資料3に詳細が掲載されている。

児童No.10は物理的な距離、児童No.12は心的な距離のことを検査者は指摘しているのであるが、他の児童においても非常に遠いところに座る、また近いところに座るなど、独特の距離を持って検査者に相対する児が多く見られた。

③表情の少なさと突如現れた感情：

児童No.13「表情は全体的に固く、観察された表情の種類は非常に少ないものとなっています」

児童No.15「検査者が間違いを指摘するとぱっと嫌そうな表情となり横を向いてしまっていました。しかし、次の瞬間切り替わり検査に向かっていました。表情の切り替わりが大きさで違和感を感じる範囲のものでした。失敗体験については持続している様子は認められませんでした」

表情の問題を指摘される児の特徴として、「表情の乏しさ」「切り替わりの激しさ」があげられていた。

④情緒的反応：

児童No.12「人物画の男の子の絵は拒否し、リーディングスパンテストでは「お父さん」という刺激語において非常に覚えが悪くなるなど情緒的な反応と思われる様子も見られました」

児童No.7「WCSTですべてN反応を示していました。遂行機能の障害と言うよりは情緒的な反応による結果と考えます」

(2) 視空間手続き課題における行動より (17例)²

検査中の行動として3人の児童に課題説明中、課題遂行中、席を立つ、もうできない、わからない、と発言する、エラーに対して過剰に反応するといった課題遂行に消極的な行動や課題に対する苛立ちを示す行動が顕著にみられたが、他の多数の児童は説明を落ち着いて聞き、課題遂行中も中断することなく集中して取り組んでいた。ただし、こういった特徴的な行動によって課題が中断されても3人の児童ではモチベーションも高く、学習が進んでいるという結果が示された。また、課題が中断して最後まで続けられなかった1人の児童については課題自体の制約が本人のやる気をくじいたと考えられる場面もあり、本人の課題に対するモチベーションが最初からなかったとは考えにくい。運動学習検査結果より、個々の児童によって、認知的処理にも得意と不得意があり、その違いにもいくつかのバリエーションがあるということが示唆された。また、課題遂行時に、その課題を不得意とする児童らについても、モチベーションは高いということが示された。

(3) 施設における学習場面の行動より (1例)³

個別指導学習場面において、注意の転導により課題への集中がとぎれる場面が散見された。注意がそれてしまった要因のひとつとして、刺激の多い環境であることが予想された。本人の視界に入るところに窓や白板、ドアなどが配置されており、注意がとぎれやすいといった本人の認知特徴があった。

² 宮尾ら⁴⁾の巻末資料4に詳細が掲載されている。

³ 高田ら¹⁷⁾に詳細が掲載されている。

刺激に対する配慮が少ないことが予想された。また、問題を解くときには席を立てて白板を使用するなど、手続きの問題も存在していた。①環境の設定、②本人の注意転導の特性による指導方法の選択、などの対策がまずは必要と考える。

児らの行動より、注意やモチベーションの持続、対人距離、特定の刺激に対する情緒的反応などの問題があげられた。しかし、そういった児ら独特の行動特徴を有しているにも関わらず、実際の学習場面においては丁寧な個別指導が行われているものの、児らの認知的特徴に関しての環境設定などの配慮は行われていない印象を持たざるを得なかった。注意の問題については、前述の「発達障害児と質的に異なる点」を発達障害児の映像データと比較検討し、特徴についてはさらに検討し、対策を検討する必要があると思われる。

3. 総合考察

「1. 被虐待児の感情認知に関する調査」では、感情認知場面課題を用いて被虐待児の認知特性および対人及び社会性の獲得に関して重要であると考えられる感情認知の特徴について示した。①エラーパターンに関しては、被虐待児群と定型発達群の両群とも、怒りや恐怖といったnegativeな意味が含まれている場面を悲しみとみなす傾向が認められ、エラーパターンには差異がみられなかった。②エラー量に関しては、被虐待児群の方が1人当たりのエラー量が多いものの、感情カテゴリー別のエラー量には両群に差が認められなかった。以上により、両群において感情発達の順序は変わらないことが予想され、被虐待児の表情認知のエラーは、発達の異常というより遅滞であることが推測された。③定型発達群に幸せ場面でのエラーは見られなかったが、被虐待児群においてはエラーが認められた。その要因としては、人生初期において重要と考えられる、快経験の不足による要因と意味理解の困難さによる要因が想定された。

「2. 学習場面および検査場面における被虐待児らの行動特徴について」では、児らに特徴的な注意やモチベーションの持続、対人距離、特定の刺激に対する情緒的反応などの問題が明らかとなった。

前述したとおり、われわれは被虐待児の認知特性及び学習に関する問題を神経心理学的に検討することは問題行動の病態を考える基盤となると考え、認知発達の特異性を明らかにすることを目的に、神経心理学的検査及び学力検査等を用いて検討した結果の報告を行ってきた。

学習状況調査質問紙を用いて実施した学習状況に関する検討¹⁶⁾では特に漢字の習得において2学年以上の遅れを示した児が読み能力で41%、書き能力で64%認められた。また割り算などに困難を示す児が多く見られ、積み重ねの必要な学習項目に関する習得が難しいことが示された。また、創造性に乏しい、新しい学習内容に抵抗する、死の概念がでてくる物語文への抵抗を示すなどの特徴が見られ

た。次に神経学的検査に関する報告¹⁵⁾では、ワーキングメモリ検査であるリーディングスパンテスト (RST) では全体の53.3%に問題を認めた。遂行機能検査である Wisconsin Card Classification Test-keio version- (WCST) は情報の一時的保持とその変換を行う能力、および課題の遂行を制御する能力を測定する検査であるが、主な指標である達成カテゴリー数 (CA) ・保続による誤反応数 (PEN) ・メンタルセットの維持困難数 (DMS) のいずれの値においても75%~93.8%が健常域に位置しており、遂行機能については75%の児童が健常域にあることが示唆された。被虐待児群はRSTが低値であるがWCSTでは問題が認められない、といった特徴が認められ、高機能広汎性発達障害群及びADHD群のサブタイプとの異同が明らかになった。したがって、神経心理学的検査の特徴からはHFPDD群及びADHD群の認知スタイルとは認知の特徴が異なっているのではないかということが示唆された。

これらの神経心理学検査及び学力検査等を用いた一連の検討により、各児の認知能力と学習効果との間に大きな差が存在することが示唆された。このような各児の特性を認識し、認知特性に合わせた教育が重要であると考えられる。今年度は感情認知および行動特徴に関する検討を行い、児らに効果的な学習方法を計画するための情報を集めたといえよう。今回の調査により、学習援助に関しては適切な環境が不可欠と考えられ、できる限り刺激の少ない場所での学習が必要と思われた。また、感情認知課題では怒り・恐怖に関する認知が難しかったことから、教える際の叱責の内容などについても吟味が必要と思われる。つまり児らはネガティブな感情をうまく理解できないことが示唆されており、指導の際には具体的な行動や目標などを提示することが効果的と本研究では予想された。なお、このことは平成20年度に行われる報酬系課題の結果とも比較し、効果的な対応についても考えていくことが大切である。平成20年度の課題研究では、実際に児らにあわせた学習方法を施行し、学習効果を検討することが中心になると思われる。また、前頭葉機能関連検査である報酬系課題の開発を行い、施行して分析する。

<引用文献>

- 1) Howlin, P, Baron-Cohen, S, et al. : Teaching children with Autism to Mind-Read. WILEY. 1999.
- 2) 亀岡智美：被虐待児の精神医学. 臨床精神医学 26 (1) : 11-17. 1997.
- 3) 井上登生：虐待を受けた子ども. 小児科臨床. 58. 4. 733-738. 2005.
- 4) 宮尾益知・鈴木繭子・池田華子・小笠原さゆり・渡邊克己・五十嵐一枝・酒井裕子・高田治：被虐待児への学習援助に関する研究——被虐待児の認知に関する研究——. 平成18年度子どもの虹情報研修センター報告書. 2008.
- 5) 宮尾益知：学習障害. 里親と子ども vol.2 2007.
- 6) 森本尚子・鈴木繭子・五十嵐一枝：アスペルガー障害及び高機能自閉性障害児の特定の状況下における感情の理解. 日本特殊教育学会第42回大会抄録集. 2003.
- 7) 丹羽健太郎・宮本信也：被虐待体験が児童養護施設在り児童の知的発達に与える影響についての検討. 日本子ども虐待防止学会第13回学術集会 みえ大会プログラム・抄録集. P96. 2007.
- 8) 野津牧：虐待が子どもに与える影響-発達という視点で子ども虐待を見る-. 人間発達研究所紀要. 16. 26-38. 2004.
- 9) 尾木和英：虐待を受けた児童・生徒への学習支援をどう充実するか. 教育研修. 64-67. 2004.

- 10) 奥山真紀子：被虐待児の治療とケア。臨床精神医学. 26 (1). 19-26. 1997.
- 11) Pollak, SD., & Tolley-Schell, SA. : Selective attention to facial emotion in physically abused children. *Journal of Abnormal Psychology*. 112, 323-338. 2003.
- 12) Smith, CA. & Lazarus, RS. : Appraisal components, core relational themes, and the emotions. *Cognition and Emotion*, 7, 233-269. 1993.
- 13) Steel, BF. : The Effect of Abuse and Neglect on Psychological Development. In Call, J. et al.(ed.) : *Frontiers of Infant Psychiatry*. Basic Books, New York, 1985.
- 14) 杉山登志郎：絡み合う子ども虐待と発達障害。里親と子ども vol.2 22-32. 2007.
- 15) 鈴木繭子・小笠原さゆり・宮尾益知ら：被虐待児における認知特性 - 神経心理学的検査から -。第98回小児精神神経学会抄録集. p26. 2007.
- 16) 鈴木繭子・宮尾益知・奥山真紀子ら：被虐待児における学業不振および行動上の問題とその病態 - 1. 認知的側面から -。第48回日本児童青年精神医学学会総会抄録集. P171. 2007.
- 17) 高田治・滝井有美子・井上真・村松健司：被虐待児への学習援助に関する研究——被虐待児の学習支援に関する研究——。平成18年度子どもの虹情報研修センター報告書. 2008.

平成19年度研究報告書
被虐待児への学習援助に関する研究
—被虐待児の感情認知および
課題時の行動観察に関する研究—

平成21年 3月25日発行

発行 社会福祉法人 横浜博萌会
子どもの虹情報研修センター
(日本虐待・思春期問題情報研修センター)

編集 子どもの虹情報研修センター
〒245-0062 横浜市戸塚区汲沢町983番地
TEL. 045-871-8011 FAX. 045-871-8091
mail : info@crc-japan.net
URL : <http://www.crc-japan.net>

編集 研究代表者 宮尾 益知
共同研究者 五十嵐 一枝
鈴木 繭子
池田 華子
小笠原さゆ里
渡邊 克巳

印刷 (株)ガリバー TEL. 045-510-1341(代)